
ワイルドヘブン

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドヘブン

【Nコード】

N5124A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

野性の天使エヴァとその他大勢によるファンタジーっぽい話。

#01 降誕

豆腐に箸で十字に切り込みを入れる。醤油を控えめに垂らして、葱を豆腐と同じぐらいの質量乗せる。

エヴァのいつもの食事風景は、この儀式から始まる。

「いつみても、それは豆腐じゃなくて葱がメインだろう？薬味が前菜みたくなってるよ」

「いいんだよ。豆腐には葱って昔から言うだろう」

「言わねえよ」

慣れてしまったのか、それほど違和感を感じなくなっている自分に恐れを感じる。

エヴァが世間知らずなのは今に始まったことではない。

それはエヴァが人間じゃないからかもしれないし、エヴァを教育したヤツが悪いのかもしれない。

エヴァは野性の天使で、俺の家に居候している。

天使だからって羽が生えているとか安易な想像は止めてほしい。

何か使命がある訳ではないし、むしろ仕事はしていない。現フリーター。

自称

「天使」

。ちよつと頭のおかしな少年だといつていい。
始めにエヴァに出会ったのは、渋谷ハチ公前。
オレは、恋人の早苗を待っていた。デートに近い誘いだっと思う。

遅れてきたオレに早苗は言った。

「彼、天使なんだって。」

「…??」

見るとそこには十一才、十三才くらいの白い髪の子がいた。

「天使？」

「うん。そこでさっき拾ったんだ」

犬猫じゃあるまいし、人間が捨てられている訳がない。天使なら…？

段ボールに太いマジックで、

「天使です。もらってやってください。」
と書きなぐつてある。

「…誘拐？ありえないし…」

「ねえ、天使って何食べるのかなあ？」

「早苗…。ちよつと…」

早苗を物陰まで無理矢理ひっぱっていく。

「何よ。まだまっ昼間じゃない。それに人が大勢いるし……」

「違うつて。本当にさっきのガキが天使だと思つか？」

「だって書いてあったし……」

「たぶん、アレは何かの例えで、天使のように可愛いとか……そういう意味だって。」

「そうなの？」

「交番にでも預けて、さっさと逃げようぜ。」

オレは面倒に巻き込まれるのが嫌だった。

しかし、その時オレはすでに面倒に巻き込まれていたのだ。

「嫌よ。私が飼うんだから」

「飼う……とか、そういうのじゃなくて。親御さんとかも心配してるだろうし。」

ふと、さっき少年が立っていた場所を見る。

少年は、ハチ公の背中に乗ってやがった。

周りの人間の視線を浴びまくっている少年に向かって早苗が手を挙げる。

周囲の人間の目がこちらに移る。

確実に、あの迷惑な少年の保護者だと思われたらう。

このまま立ち去ることは難しい。そう判断したオレは早苗に手をつながれた、天使と共に、八千公前を後にした。

#02 説得

できるだけ人気のない喫茶店を選んだ。

灰褐色の古い建物で、全体的に薄暗い。

「話って何よ…」

何を勘違いしたのか早苗の顔が緊張していた。

「この子をどうするのかって話だよ。」

「だから私が飼うっていつてるじゃない。」

オレは少し考えて。

「ヒト一人飼うのにどれだけのエサ代が必要か分かってるのか？」

「…それは…」

本当はそういう問題じゃないんだけど、今は何でもいいから早苗を説得するしかなかった。

「教育費だって今は馬鹿にならないんだ。大学まで行かせようと思つたら…五千万ぐらい必要だ。」

「……………」

「それに、飼い主には生半可な責任じゃ、なつてはイケナイ。この

子の面倒を一生背負っていかなきゃならないんだぞ？それでもいいのか？」

「……………」

ひどく落ち込み塞ぎ込んだ早苗を見て、良心が痛んだ。言いすぎたかもしれないと反省した。

沈黙が続き、アイスコーヒーの氷が鳴った。

天使は、オレンジジュースの氷をねぶっている。

「…分かった…」

内心ホッとした。分かってくれたのかと…

「分かったわ…私たち…結婚しましょう。」

なぜ…早苗の思考回路はもしかしたら宇宙の仕組みよりも複雑なのかもしれない。

「この子を育てるには母親だけじゃなく父親の力が必要なのね……………」

アイスコーヒーの氷が鳴った。

説得が失敗に終わった。

早苗の中では既に決意は固まっているようだ。

#03「家庭」

オレと早苗はなぜか婚姻届なる物を役場に持っていき晴れて夫婦となった。

そして、21という若さで子供まで授かった。

少年の名前は

「エヴァ」

。なぜこんな日本人離れた名前になってしまったのか…今でも理解できない。

たぶん、その様な手続きがオレの知らないウチに行われていたのだろう。

「なあ、早苗…」

「何？あなた。」

早くも適応している所が早苗の凄い所だろう。

「エヴァの事なんだけど…」

「どうしたのよ改まった顔して。もしかして…」

早苗の妄想回路が働かないウチにオレは切り出した。

「アイツ、天使なんだよなあ」

「そうよ…今更何言ってるの」

「ホントに？」

なぜか早苗は目を泳がしている。

オレは、あることに気付いた。天使というのは、たぶん愛を運ぶ者だ。

そして、オレ達は結婚した。

最初はエヴァが本当に天使だという可能性も考えた。

しかし、あまりにも早苗は準備が良すぎる。

「これ、全部お前が仕組んだのか早苗？」

できるだけ真剣な顔で早苗を問いつめる。

「そうだとしたら？離婚？民事訴訟？」

「いや、まあ…。」

オレは上手く言えなかった、早苗の事は好きだったし夫婦になれたのは正直に嬉しかった。

「それは困る…民事訴訟は…」

離婚は…とは言えない。

全て陰謀だとしても、そうじゃないとしてもオレは幸せだと思う。

「エヴァ、葱残しちゃだめよ!!」

早苗はそれなりに様になっている。オレはどうだろうか…。

「そっだぞエヴァ、葱は体に良いんだ、いっぱい食えよ。」

豆腐に箸を突き刺して、オレ達はぎこちない夫婦生活と頼りない子育てをスタートさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5124a/>

ワイルドヘブン

2010年10月28日08時06分発行